INFORMATION

寺子屋トーク

第23回寺子屋トーク
虐待が子どもに与える影響は…

23回目を数える寺子屋トークは、7月20日に開催します。

今回は、関西こども文化協会との共催で、「虐待・暴力がこどもの心に与える影響」と題し、児童虐待研究で著名な中央大学教授の横湯園子さんを講師にお迎えします。

「子育てが難しい」といわれる現代、児童虐待の件数も増加する一途です。虐待を受けた子どもたちは、どのように成長していくのか。なぜ虐待をしなければならなかったのか。

虐待を通して社会が抱える課題、おとなが抱える課題の解決策を探ります。ぜひご参加ください。

○日　時／7月20日（祝）　2:00～5:00
○場　所／應典院本堂ホール
○参加費／500円（一般1500円）
○講　師／横湯園子さん（中央大学教授・日本子どもの虐待防止研究会）
○主　催／應典院寺町倶楽部・NPO法人関西こども文化協会
※詳細は同封のチラシをご覧ください。

いのちと出会う会に50名を超える参加者

今年度の交流事業としての新企画、「いのちと出会う会」が始まりました。

この会は、生きること、老いること、病すること、そして死について仲間と語り合いたい、そんな集いです。今後毎月第3木曜日に定期開催をしていきます。

第1回目は、6月20日に開催。「死にゆく患者に語りかける言葉」と題して、話題提供者に南吉一さん（枚方在宅ホスピス「あおぞら」所長・医師）をお迎えしました。

当日は50名近くの参加者で大盛況。南さんの仕事を通じて体験された、死を目前にした患者さんとのやりとりは、参加された方々に様々な思いを残しました。

第2回は7月20日（祝）に、宮本直樹さん（南河内・観音寺住職）を話題提供者に迎え開催します。ぜひご参加ください。

【第2回】
「仏教紙芝居は心のアート」
・ゲスト…宮本直樹さん
（南河内・観音寺住職）
・18：30
・¥500
※8月はお休みです。第3回目は、9月21日に宝塚NPOセンター事務局長の森綾子さんをお迎えする予定です。

パフォーミングアーツ・メッセ2000in大阪

パフォーミングアーツ・メッセ2000in大阪は、芸能・芸術活動を行う団体を始め、劇場・ホールなどが一同に会する催し。音楽や民俗芸能などの公演も見ることのできる芸能・芸術の祭典です。

今回、この催しに應典院が参加。多くの方々に應典院を知っていただく、絶好の機会となりそうです。

理事の西島宏さんが、メッセの事務局を担当していらっしゃる関係で、今回チラシとチケットを同封させていただきました。ぜひ、会員のみなさんもご参加ください。

・8月1日（火）・2日（水）
1：00～5：30
・大阪国際会議場

【新入会員ご紹介】

（2000年6月30日まで）
4月15日以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
有田優美子　大阪市住之江区
三木　康彰　大阪市東成区
日阪　敏春　大阪市鶴見区

【岡山県】
八幡　弘之　赤磐郡

サリュ VOL. 20
應典院寺町倶楽部のニューズレター
発行日　2000年6月30日
（偶数月発行）
編集人　池野亮、川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

Salut

[サリュ]
フランス語で救いの意

2000 JUNE
vol.20



「21世紀は芸術の時代」「アーツ・マネジメント」などの言葉が目につくようになった。アーティスト（＝表現者）はけっして「特別な人」ではなく、誰でも本当はアーティスト。喜怒哀楽の感情を素直に伝えることも自己表現。言葉にならなくてもいい、自分なりの表現がまわりに受けとめられたとき、つながりやエネルギーがわき出すのを実感するはず。

お互いを認め合い、自己表現できる場を創り出す。そんな環境を整備することも「アーツ・マネジメント」。4年目を迎えた寺町倶楽部に、そんな視点を取り入れたい。そこからきっと、次の時代を切り拓く何かが生まれそう。自分なりの表現をあなたも……。

第4期総会報告

独自性の高いNPOを目指して……

寺町倶楽部第4期の総会を6月20日（火）に開催しました。
3年間の活動を振り返ると、事業も定型化しつつあり、年々その評価も高まりつつあるように感じます。ただ、成熟した団体へと成長するには、さまざまな課題をクリアしなければなりません。
この総会は、これからの方向性を確かめる、重要な機会となりました。
21名出席、委任状96名。



方向性を具現化する

総会は午後7時に開会。

冒頭、田村精造理事長のあいさつでは、「3年間の活動を通して、ようやく倶楽部の方向性が具体的に見えてきたのではないか。この第4期は、その方向性を具現化するために、組織を固めていくことが大切」とのお話がありました。

確かにこの3年間は、事業を通してさまざまな試みを続けてきました。改めてその3年間を振り返ってみて、これから目指すべきものが見え、その目標に対しての現状の課題が明確になったように感じます。

議事は、まずは第3期活動報告、並びに会計報告のご確認をいただきました。

会員の状況では、年間を通して、会員の総数はほぼ横這い状態ですが、やはり退会される方もいらっしゃる状況です。会員みなさんに倶楽部の意義をしっかりお伝えすること、また



たその機会を会報だけでなく、多く設けることができるのかがこれからの課題だと考えます。

自立したNPOを目指す

総会でもっとも重要なことは、これからの活動をどのようにしていくのかということ。

第4期の活動計画では、これからの倶楽部の方向性を考える上で、重要な提案が3点発表されました。

まずひとつめは、財政基盤の強化です。

NPOやNGOの収入は、会費収入、助成金収入、事業収入の3つが一般的で、それをもって、収入の安定化を図っています。対して倶楽部の現状では、収入のほぼ100％が会費収入です。当然、会員の増減によって収入が変動し、また会員数が減少すれば、活動の規模を縮小せざるを得ません。

独自性の高いNPOを目指し、事業の活性化、また安定化のためには、新会員の獲得に向けた活動はもとより、団体や事業に対する助成金を得られるように働きかけることが必要になってくるでしょう。

ふたつめは収益事業に向けての調査です。

今まで倶楽部の事業は収益を目的とするのでなく、理念に沿ったものを催しという形で、いかに多くの市民に提供できるかが目的でした。

財政基盤の強化にも関わってきますが、倶楽部の理念に沿った収益事業、とくにコミュニティビジネスとして事業化できるかについて調査を行います。

三つめは外部モニターによる評価制度の導入です。

各事業は定番になりつつあり、様々な方面から高い評価をいただいています。しかし、個々の事業ごとではなく、今後の倶楽部の発展に向け、研究者やジャーナリスト、NPOの専門家等々の方に、様々な角度から客観的・トータル的な評価が必要だと思います。

その評価については、次年度の総会時に公表し、次年度以降の活動方針に反映させていきます。

より充実した主催事業を

第4期の活動事業は、「コモンズフェスタ」「舞台芸術祭」「寺子屋トーク」を前期同様に開催することを確認いただきました。

当然、過去の経験をふまえ、より充実した計画を練っていますが、多くの交流のある団体とネットワークしながら、今まで以上に内容の深いものを目指していきます。

また、NPOサポート事業（前期市民活動サポート事業）も継続することが決定。

しかし、参加された会員の方から、「財政が厳しい現状で、なぜサポートをする必要があるのか。また倶楽部の方向性が明確に定まりきっていない今、どういう団体をサポートし、ネットワークを深めるのかが明確にできないのではないか」との厳しいご指摘もありました。

確かに、サポートする団体を公募し、専門的な立場の方に審査を依頼、決定するという形が理想的でしょう。将来的な課題として、今後検討していく必要があると考えます。

交流事業では、新しく「いのちと出会う会」を主催事業に加えました。ゲストからの話題提供をもとに、参加者が話し合い、感じ合う、その中で人と人との交流を紡いでいく催しです。ぜひ、多くのみなさんのご参加をお願いします。

新理事組織に期待

役員改選では、今回大きな動きがありました。5月31日の理事会で、「第4期を迎え、理事体制を問い直す必要があるのでは」との理事長からの提案があり、理事会の役割、また理事会と事務局の理想的な関係性が議論されました。

結果として、理事会が機能的に事務局と連携し、運営を進めていくとの方向性を確認しました。

総会では、理事会での経緯が理事長から説明され、実行力のある理事会組織の必要性を参加者のみなさんに確認いただきました。

そして、新しい人事として下記のように決定しました。新たな6名の理事に、今後活発に会の運営にご参加いただくことを心強く感じます。また、この3年間、理事としてご活躍いただき、ご退任された方々には、倶楽部の一番大切で、たいへんな時期を支えていただいたことを心から感謝いたします。

第4期の総会を終え、新たなスタートを切った寺町倶楽部。今までの実績を土台にしながら、これから成熟した団体へ、成長を目指していきたいと思います。

新理事ご紹介（五十音順）



○石黒良彦さん
（写真右から3人目）
今年の新規主宰事業「いのちと出会う会」の呼びかけ人。倶楽部の会員には、一昨年に應典院で奥様の遺作展を実施したことをきっかけに。そのネットワークの広さは、今後の倶楽部の事業でも、大きな役割を果たされることと思います。

○伊藤伸二さん（写真右から4人目）
日本吃音臨床研究会代表。第1回のコモンズフェスタにご参加いただいたことをきっかけに会員に。現在、毎月第2土日に竹内敏晴さんの「こころとからだのレッスン」を主催。

○関浦照隆さん（写真左から5人目）
中小企業診断士、NPOコンサルタント。倶楽部の交流事業にご参加いただいたことをきっかけに会員に。NPOコンサルタントの視点から、今後の倶楽部のあり方について、参画いただけるものと思います。

○蔦田　夏さん（写真右から2人目）
関西こども文化協会専務理事。倶楽部の主催事業をたびたび共催している関西こども文化協会。今後も、事業の企画や倶楽部の運営などについて、活躍していただけると思います。

○三木康彰さん（写真左端）
パドマ幼稚園PTA会長。会員の中にもパドマ幼稚園の保護者の方が大勢いらっしゃいます。幼稚園と倶楽部とのパイプ役として、ご活躍いただけるものと思います。

○森栗茂一さん（写真左から4人目）
大阪外国語大学助教授。應典院を見学にこられたことをきっかけに会員に。都市民俗学がご専門で、研究者としての立場から、倶楽部の方向性など、示唆いただけるものと思います。

■役員人事（敬称略、※印は新任）

・理事長	田村	精造（賛助会員）		※蔦田	夏（一般会員）
・副理事長	西島	宏（一般会員：應典院プロジェクト）		名畑	孝（一般会員）
	榛木	恵子（一般会員）		※森栗	茂一（一般会員）
	※三木	康彰（一般会員）	・監　査	扇谷	順介（賛助会員：應典院総代）
・理　事	※石黒	良彦（一般会員）		志野	義治（一般会員：應典院総代）
	※伊藤	伸二（一般会員）	・参　与	秋田	光茂（大蓮寺住職）
	川口	圭子（一般会員）		秋田	光彦（賛助会員：應典院住職）
	北	達一郎（一般会員）	・事務局長	池野	亮（應典院プロジェクト）
	※関浦	照隆（一般会員）			

「参加・体験・交流」を活動テーマに、新たな市民文化の発信をつづけます！

～第4期活動事業～

主催事業

◆コア事業

・'00年11月4日～12日
コモンズフェスタ2000 LIFE（仮称）

〈コモンズ・フェスタ〉は、應典院を舞台に、さまざまなジャンルから、個性的なNPOが集結する市民活動フェスティバルです。タイトルの〈コモンズ・フェスタ〉とは、異なる文化がぶつかって生まれる、出会いとつながりを願ってネーミングされた造語。形態を問わず、ゆるやかにテーマを共有しながら、もうひとつの「共」のコミュニティを形成します。

・2001年1月中旬～2月下旬
舞台芸術祭　SPACE区DRAMA2001

過去2回の舞台芸術祭は、舞台芸術の持つ文化性を広く市民に発信するために開催してきました。今年度の第3回目は、鑑賞するのではなく、自らが参加し、体験するイベントとして企画します。文化性はもとより、参加することで得られる舞台芸術の違った可能性を探る催しにしたいと考えています。

◆寺子屋トーク

恒例の寺子屋トークを以下の予定で実施します。

・6月10日　大阪女子大学助教授　吉田敦彦さん他
「ホリスティック教育・学び＝つなぐ力」
・7月20日　中央大学教授　横湯園子さん
「虐待　暴力がこどもの心に与える影響」
・10月2日　世古一穂さん、神仁さん他
「寺院とNPOの協動と考える」
・11月12日 碑文谷創さん、森綾子さん他
「日本人の死に方大論争パート2」
・12月24日 作家　辺見庸さん
「21世紀法要」
※現在、開催予定のものを記載しています。

◆NPOサポート事業

NPOサポート事業は、その組織や規模の大小にとらわれず、自主的に活動を行うグループ、団体をサポートしようというものです。ただしサポートするだけでなく、倶楽部とサポートグループ、団体が、活動を共にすることによって、その発想や考え方などが相互に交流し、互いの視野を広め、その意味を追求することを目的とし、それによって、互いの活動がより深い社会的意味を持つように進めていきます。

2000年度事業の基本方針としては、NPOとしての寺町倶楽部のテーマ（学び・気づき・遊び）を十分に打ち出した、事業のあり方（再構築）を求めていきます。
定例の事業にも、よくテーマを馴染ませ、刷新を進めるほか、今年度は組織運営面からも倶楽部の現状を見なおし、独自性の高いNPOとしての地歩を固めます。

◆交流事業

・「いのちと出会う会」
（※新規事業、1月・8月以外の毎月第3木曜）

いのちと出会う会は、いつか来る「人生の店じまい」を見据え、生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくりと語り合う場です。毎回、話題提供者をゲストとして迎え、ゲストからのお話をもとに参加者同士が語らいながら「場」をつくっていきます。

・6月15日　話題提供者:牧方在宅ホスピス「あおぞら」所長　南吉一さん
「死にゆく患者に語りかける言葉」
・7月20日　話題提供者:南河内・観音寺住職　宮本直樹さん
「仏教紙芝居は心のアート」
・9月21日　話題提供者:宝塚NPOセンター事務局長　森綾子さん

・定期交流会

会員同士、また誰もが自由に関われる場を、定期交流会として年3回開催します。

・8月4日　納涼会
・12月26日　忘年会
・4月　夜桜会

共催事業

会員が定期的に参加できる機会として、他団体と協力し、講座事業等を企画します。他団体と協力を深めることにより、事業の広がり、活性化を目指します。

現在具体的な事業は決まっていませんが、講座事業を考えたいと思っています。

広報事業

①広報誌サリュの発行（年6回）
②年次報告書の発行（8月）
③各主催事業の広報宣伝活動

協力事業

その他、外部団体と提携して行う協力事業があります。広報面等での協力を行います。

会　議

①会員総会
'00年6月20日
②理事会
総会前に1度と、次年度の確認のための理事会を1度を基本に、随時開催したいと考えています。

その他

・應典院インターネットに情報提供の協力
・應典院ブックレットの販売協力
・應典院年報の配布協力

市民活動サポート事業　支援団体より活動報告

昨年度より開始した市民活動サポート事業（今期よりNPOサポート事業）。先日の総会では、昨年度支援した「夕陽さんさんの会」「関西こども文化協会・まんまくらぶ」の両団体から、代表の方にご出席いただき、年間の両会の活動をご報告いただきました。

●

「夕陽さんさん（SUNSUN）の会」

夕陽さんさんの会からは、森田道太郎事務局長にご出席いただきました。同会の事業としては、「夕陽」をテーマに絵手紙と一行詩の一般公募（1999年8月）、第2回悠遊博（1999年9月11日）、講演会「夕陽と大阪城」（1999年11月13日）、2000年イヴin舞洲（1999年12月31日～2000年1月1日）に昨年度取り組まれました。

倶楽部としては、資金の援助のほか、定例会議における場の提供、また各事業の広報協力などを支援しました。

「寺町倶楽部の支援により、事業の広がりを見ることができた。できれば、もう少し倶楽部の会員の方に、事業にご参加いただければ、交流の輪ももっと広げることができたと思うが、新しい出会いが数多くあったことが大きな収穫」と、森田事務局長。

夕陽をテーマに大阪の町おこしを目指し、活動を続ける同会をこれからも応援していきたいと思います。

◆

「関西こども文化協会・まんまくらぶ」

子育てサークル「関西こども文化協会・まんまくらぶ」からは、柳瀬真佐子さんにご出席いただきました。まんまくらぶに対しては、資金援助の他、事業に対する場の提供を主に支援いたしました。

中で、11月9日にはアトム共同保育所所長代理の市原悟子さんの講演会、1月16日にはカプラワークショップを應典院を会場に実施されました。これらの事業をきっかけに、大阪市の他区で、まんまくらぶ発足の可能性がでてきました。

「寺町倶楽部から資金を援助していただいたことで、大きな事業を年2回開催することができました。参加された方を中心にして、まんまくらぶの理念を柱にして、地域に応じた子育てサークルをつくり、ネットワーク化することを目指していきたい」と柳瀬さん。

関西こども文化協会とは、今年の寺子屋トークなどの事業を共にすることも多くあると思います。互いに刺激しあいながら、これからも関係性を深めていけたらと思います。

EVENT REPORT

第22回寺子屋トーク
つながりを見つめ直そう そして、生きる力を……

去る6月10日、日本ホリスティック教育協会との共催で、第22回寺子屋トーク「学び＝つなぐ力」を開催しました。

“ホリスティック”の語源はギリシャ語の“ホロス（holos／全体）”。同じようにホロスから派生した言葉に、全体（whole）、健康（health）、癒す（heal）などがあります。

「部分ではなく全体を見る」というホリスティックの概念が日本に紹介されて約15年、教育だけでなく医療の分野でも取り入れられています。

従来の教育は、子どもたちを競争社会の一員に育て上げることをめざしていました。つまり、「社会に出て役に立つかどうか」という基準で授業内容が決められ、偏差値だけで子どもたちを評価するなど、“こころの豊かさ”や“生きる力”といった目に見えないもの、具体的にどう育てればいいのかわからないものを置き去りにしてきたのです。

そういった反省から、こころとからだ、学校と家庭と地域など、あらゆるものをつなぎ、「全体としての人間観」に立ったホリスティック教育が各地で展開されています。

当日は朝10時から始まり、参加者全員でのワークショップと、4つの分科会（「学校と地域をつなぐ総合学習」「女（ひと）と男（ひと）をつなぐジェンダーフリー教育」「教科と教科をつなぐ総合学習」「人間と人間を超えるものをつなぐこころ・魂の教育」）が行われました。

いずれも講義形式ではなく、参加者一人ひとりが気づき、学び合えるよう工夫されたプログラムで、初対面の人同士が多かったにも関わらず、会場全体はなごやかな雰囲気に包まれていました。

ホリスティック教育を「いのちの織物」だと表現することがあります。

「他の生き物や自然との関わりの中で自らを表現し、すべてのものとつながり合いながら全体として一つの織物を成すことが“生きる”ということであり、そのプロセスすべてに“学び”がある」という意味が込められているのですが、今後の倶楽部の活動にも取り入れたい視点だと思いました。



VOICE ボイス

今回のVOICEは島野亜由美さん。島野さんは3年前、幼児と母親の遊びと語らいのサークル「なかよしクラブ」を立ち上げられました。2年前から應典院に活動の場を移し、毎週水曜日に集まっています。その活動についてお聞きしました。



「なかよしクラブ」の発足は3年前、上のお兄ちゃんがまだパドマ幼稚園に通っていたときのことです。パドマは遠方から通われる方が多く、園が終わってから友だち同士で遊ぶことがむずかしかったので、「私の家で遊びませんか」と声をかけたのが始まり。次第に参加する人が増え、2年前、應典院に場所を移しました。

ここでは、なわとび・ボール・ブロックなど、子どもたちが工夫できるようなおもちゃを使っています。たとえ一人でいる子がいても、私たち親はながめているだけ。すると、子どもたちはお互いに歩みよって、どうすればいいのかを自分たちで探っていきます。塾やおけいこなどが子どもの社交場となっていますが、「ただ遊べる場」も大切ですよね。

また、卒園した子がひょっこりやってきて年少の子と一緒に遊んだり、タテのつながりが生まれています。一人っ子が多いので、こんな異年齢のかかわりもうれしいですね。

「なかよしクラブ」はお母さんも一緒に参加することが原則で、親同士いろいろな話をしながらつながりを深めています。みんなで子どもの成長を見届けている、なかよしファミリーといった感じですが、3年間継続できたのも、同じ気持ちを持つお母さんたちの大きな支えがあったからです。これからも、他のお母さんと協力しあい、長く続けていきたいと思っています。

應典院はたくさんの人と出会えるチャンスにあふれているので、次のステップでは子どもたちがいろんな人と交流して学び合える機会をつくりたい。たとえば、おじいさんに将棋を習うなど、そんな交流が生まれてゆくことを望んでいます。

Interview

應典院と「利他的余暇」
瀬沼克彰さんインタビュー



去る3月29日、應典院に日本余暇学会副会長で桜美林大学教授の瀬沼克彰さんが来山、住職と懇談されました。瀬沼さんは元文部省生涯学習局社会教育官で、国や行政の生涯学習施策に通じ、多くの関連の著作で知られる斯界一線の研究者。最近の余暇意識の変化から、楽しみながら他人の貢献する「利他的余暇」を提唱されています。

●

私の提唱している利他的余暇とは、主体的に取り組む姿勢をより重視します。他人のために貢献することを自分の楽しみとする姿勢です。

昨年の余暇開発センターの発表した『レジャー白書』でも、「楽しみとして行われながら、結果的に社会性を帯びてくるような活動」を社会性余暇と定義しましたが、これまでの気晴らしや休養といった利己的な活動と異なる、新たな余暇観が台頭してきているといっていいと思います。

定年を迎えたり、定年後を意識しだしたりした団塊世代の人たちに社会とのかかわりを強く求める傾向があります。利他的余暇も、50代の男性の意欲と関心が大きい。昔のように「男は会社が生きがい」でなくなった今日、中高年男性が職場から地域へ大きく目を向け直すことも想像できます。

應典院は、利他的余暇の時代に十分適応した施設と企画性を持っているといえます。これからは社会人向けに、生き方に関するノウハウの講座を開いて、できるだけ彼らが主体性をもって進めることのできるような場づくりを心がけていかれてはどうでしょう。本来お寺は日本人の心の拠り所。應典院の今後の活動を興味深く見守っていきたいですね。

（文責＝事務局）

秋田住職発 應典院掲示板

■晴れやかに3周年記念の集い

應典院が新たにスタートして早3年、去る4月16日、高名な宗教学者山折哲雄さんを招いて「3周年記念トークの集い～こころの場所はどこにあるか」を開催、満堂の150名に参加いただきました。

当日は、山折さんの講演、さらに日本YWCAの金香百合さん、秋田住職を交え、現代の「場」を巡るトークとなりました。会場には当山とご縁の深い大学、行政、NPO団体などから多数の招待者もあり、ともに3周年をお祝いいただきました。

当日の詳細は、招待者からのお祝いのメッセージと合わせて、應典院イヤーブック2000（8月刊）にて。

■桂文我師匠の毎月落語会

故・桂枝雀の弟子で、上方落語の若手ホープのひとり桂文我師匠の落語会が應典院でスタート、6月から今後毎月開催されることとなりました。



この試みは、文我師匠が應典院の本堂に「惚れきって」始まった企画、当山としてもできる限りご協力させていただくつもりです。暑い夏、笑いで乗り切ろう!

○7月3日
「文我　梅団治二人会」
18：30～
前売り2000円、当日2500円

○7月30日
「おやこ寄席」
14：00～
子ども…前売り1500円、当日2000円
大　人…前売り2000円、当日2500円
親　子…前売り3000円、当日4000円

（前売券は應典院で取扱中）

■應典院の新スタッフ、よろしく。

いよいよ2000年度、應典院でもこの4月からスタッフが増員となって、新体制がスタートしました。

常勤スタッフとして大塚郁子さんが新採用、帝塚山学院大学卒業後、白鹿酒造の博物館に学芸員として勤務した経験を持ちます。また、アーツ・スタッフとして柳沢尚樹さん、林裕介さんが参加、演劇ホールとしての企画、管理全般を担当します。本紙「サリュ」の編集は、川井田祥子さんが、組織マネジメントを丸谷亮子さんがそれぞれ担当、全体の統括を4年目の主事池野亮さんがとります。

4年目を迎え、いよいよその真価を問われる應典院。その未来はフレッシュなスタッフの力に委ねられているといえそうです（写真前列右から大塚・丸谷、後列右から柳澤・池野・川井田・林）。

